

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和2(2020)年
4月号

通巻596号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和2年4月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製本
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



漁村の風景

国立ハンセン病療養所・長島愛生園(岡山県瀬戸内市)

宮本真二さんの絵(文・6頁)

昭和44(1969)年4月23日 月次祭法話より

御魂鎮めすることの意味

法主 矢追日聖(満57歳)

昔も今も話は同じ

どちらを向いても若葉が伸びて気持ちがいい時になってまいりました。今年はずつじも非常にきれいに咲いておりまして、藤の花も房がたくさん下がっているんで、何かしら嬉しいような、ありがたいような感じがするんです。

祭典は二時からということになっておるんですが、今日は三十分ばかり遅刻しました。別になまくら起こしたのではありません、ちょっと御魂鎮めをやっておりましたので、こちらへ出て来る時間が遅れたんです。

いつも私がこうやってあなた達に話をするわけですが、聞いてくれてもくれなくても、どちらでもいい、私は喋っておったらいんです。とにかく今自分の気持ちの中にあるものを、出来るだけ通ずるように言葉に変えているだけなんです。それがあなた達の気持ちの中に、全部溶け込むということは不可能でしょう。言葉を通して理解は出来るとしても、それを本当に心の中で消化出来ないという人はたくさんいると思うんですね。

けれども私にしてみれば、そのほうが結構なんです。一から十までみな、私の言うことが心の栄養になるように理解してもらえらば、私の存在する意味がない。そうなたら、私は産まれて来なかったかと思えます。だからこそ、毎月一回こうやって話していますが、同じことばかり繰り返してもう二十何年間です。

その時の状況に応じて言葉を変えているだけであって、別段、昔も今も変わったことは何も言っておりません。

けれども、小学校や中学校で習うこと、高等学校で習うことのように、教える側は同じことを言っても、生徒のほうは段々、知能が発達してくる。そうすれば、あなた達にしてみれば受け取り方、聞き方も変わっているかもしれない。

大倭に来てこういう雰囲気の中になると、話がありがたいと聞いておられるかもしれませんが、ここで受け取った「味」というものを、自分の家庭とか生活環境の中で、お互いがどれだけ生かしているか。これを反省してもらったらいいいと思います。

お社を形だけ祀るのでなく

今、この拜殿でも目の前にお社やしろが三つ並んでいる形を見たら、簡単に「あつ、ここに神さん祀つてある」というような受け取り方をするんですね。お社さえ祀れば、その家の人は無病息災でいけるとか見るのは軽率なんですよ。

お社にはひとつの霊体の波長を納めるという形になるんですが、ここであなた達によく知ってもらいたいと思うのは、肉眼で見える世界と、肉眼では見えない世界があって、その両方を見なければいけないということなんです。私がいつも言っていることだけれども。

普通の医者には、肉体の形に現れているものだけを見て病気を発見し治そうとするけれども、そうはいかない。人間には心というものがある。その心の働きと肉体が密接不可分な関係にあって、それを切り離すことは出来ないんですね。

子供が池に落ちた時、それを見た瞬間に顔色が

変わると思うんです。物質的には自分自身に関係がない。しかし、それを見た瞬間に気持ちが悪くなる。そうすると顔色が変わる、助けに行こうとしても足が震えて動けないなど、肉体上に変化が現れてくる。心の働きがいかに肉体に関係を及ぼしているかということ、これはあなた達が日常的に経験していることなんです。

それを今度は大きく飛躍して考えてみると、地球で毎日私たちは寝起きしております。地球が宇宙の中で浮いているのか知りませんが、とにかく浮いているということは、想像も出来ないほど神秘なんです。目方にしたら大したものと思う。そういうようなものを浮かしている力があるんですね。遠心力か求心力か何か知りません。そういう目に見えないものが、いつでも一つになって調和をとっているんです。

靈魂と人間は常に表裏の関係

この世の中に生まれて来た人が、死んで元の土に還る。それでその肉体に宿っていた生命体はどこにあるのかというと、場所はありませんがどこかに拠点があって、波長で動いているんです。そういう肉体を持たない霊体というものが存在します。

生きている肉体を持った人間と、霊体になっている人間とは、肉体と心のような関係で常に交流しなければやっていけないことになっている。これは理屈じゃないんです。

我々人間から見ると、この肉体の機能が駄目になつたら死んだと言っけれども、肉体が自分じゃないんですよ。この肉体に宿っている本霊というものが自分なんです。

肉体は借りものですから土の中に入ってしまう

う。けれども靈魂というものは残っている。だから、靈魂という肉体のない人間と肉体を持つている人間が、裏表の関係で仲良くしなければならぬということなんです。

我々の今の世界は教育であつても政治であつても、現象界だけ捉え、靈界のことは全て蓋ふたをして問題にしない。そういうところに大きな盲点があるんです。私の場合はそう言えるんですけれども、そんなことを信じていない人はもちろん全面的に否定しますよ。

御魂鎮めは霊体と人間の縁結び

肉体のない人は、お互いに知らない世界で結び付いている肉体のある人のところへ、肉体を通したり生活を通したりして知らせて来るんです。そういうような縁があつて出て来るんですね。そのために、例えば病気になる場合もあれば、わけのわからない事故が起きてくる場合もある。言い換えると、靈魂が出て来て我々人間に障害や災いを起こすんですよ。

だから、「靈障害」という言葉を使っていますけれども、本当だったら一方的な勝手な言い方なんです。靈障害なんて言うのはもつての外ですけれどもね。

病気になるつたらかなわん、病氣の原因になるのは悪靈や邪靈や、けしからんとなるけれども、靈界人は一旦死んでいる人やから、死ぬとか生きるとか問題じゃないんです。だから治らん病氣になつても、霊体から見たらまだ気が付かないか、もうちょっと苛めてやるか、死によつたかて靈界に来るだけやという、そんな軽い気持ちだから悪意はないんですけど、その霊体が私に訴えて来るんですよ。

だから鎮めるといのは、人間の側が霊体の気持ちを見出してやることです。つまり生きている人間と霊体を仲良く結び付けさせる、縁結びをするのが御魂鎮めなんです。

同居する家族として祀る

御魂鎮めをしたからといっても、その病気が治らない場合もたくさんあるし、治る場合もある。それは病気をしている人が持つている命にあるんです。だから一概に御魂鎮めをしたからといって、病気が治るとか治らんとかは、私の場合はよう言いません。

不思議にとか、奇跡とかいう言葉で表現するよくな治り方をしている人も、私の扱っているケースの中にはたくさんあります。その代わり死んでいる人もたくさんいるんです。だから、あんな病気で大倭に行つて御魂鎮めして治った人や、うちの場合もうちよつと軽いから治るやろと思つていと大間違いです。

その家の人と縁を結んで、霊界人も家族として共に同居してもらおう。そうすれば霊界人も幸せになるし現界人のほうも幸せになるんです。病気が治るか治らないかは、どつちになつてもこだわらないという気持ちが一番結構なんです。

信仰したら都合よくいきますよとか、お稲荷さん祀ったら商売繁盛しますよとか、そういう人間に都合のいい交換条件を押し付けて信心させるといのが、今までの宗教団体の大部分であろうと思つてます。

けれどもこれは欲の塊ですから、そんなものが霊界や神さんに通じたらおかしいですよ。何億の金を積んでも、霊界人は一銭も使いません。神さんを利用するというような考え方は、神さんを

冒瀆していることになるんですね。本質から見ると、物の世界を超越したところに霊界人の心というものがあるんです。

霊界でなく、宇宙の心が絶対

霊界の人達と我々の肉体を持つている人間とを結び付けていく場合、両方に通じるものは宇宙の心にあるんですよ。これを「神ながらの法」と、私はいつも言っています。

宇宙の摂理に基づいて我々は動かされているんです。これは霊界人であってもそうであるし、現界人であってもそうです。だから、人間が絶対者と考えるような神さんというものは霊界の中にはいないんです。

絶対とするのは宇宙の大神様です。

私達は寝ている時にでも血液が循環しているし、また自分が意識していないのに吸ったり吐いたり勝手に呼吸している。こういうように自分の意識以外のところで、自分の肉体に働きかけているものが、誰にでもあるんです。動物であろうが植物であろうが、また大きく言えば地球であろうが、全部そういうようになっております。

太陽であろうが星でも月でも、全部を何かの力で動かし、そして我々を生かさせているのが宇宙の心です。そういうものを絶対とするんです。それを大倭では「太加天腹大神」という名前にしていますけれども、太加天腹大神という神さんがいるのと違うんですよ。

宇宙の根本の生命体というか、根本のエネルギーです。それを太加天腹大神という名称にして帰依しているわけなんです。これは意識してもしなくても付いて行かなくてはしょうがない。

夜が明けたら起きるし、夜になれば寝なくては

ならない。飯食うとるんやから大小便もせんならん。宇宙の摂理というものは絶対的なんです。

我々が絶対帰依する大神様というのは、木仏金仏じゃないんです。どこそこの神社の神さんであろうが、すべてその大神様の支配下にあるんですよ。お社に祀られている霊体と我々生きてる人間とは対等(対等)なんですよ。

仲良くなってお互い助け合おう

我々人間同士でも違う人が集まれば、能力の差もあるし趣味も違うし、みんな個人差があります。これと同じで霊体でもいろんな種類があるんですよ。だから仲良くなってお互い助け合おうとていくのが一番いいんですよ。

そういう意味において御魂鎮めをする、家族が一人増えた形になるんです。その増えた家族と相談もして、お互い協力し合うようにして生活していくと、望まなくても何かしら都合よくいくんです。

そりやどこでも御魂鎮めはやっていきますよ。夜の丑三つ時に電気消してやつているところもあるけれど、それは人にもよると思う。私の場合、お日様の下でも同じです。

私もちよつと気違いやから、相手もそういうのが出て来るかもしれない。だから御魂鎮めの時は私なりに確かめて、大倭の霊界人のグループの中に一つの座を与えるわけなんです。大倭で座を持つと、ここに集まって来るんです。

そんなことをいつかお話しする機会があると思えますけれども、今日は、お社に鎮める神さんを祀るといことは、ご利益主義的なことではないと特に理解してもらいたいと思います。

(文責・編集部)

こまれる魂魄の地を訪ねて(第50回)

八丈島赦免花伝説

— 亀山城跡に移植された蘇鉄に花が咲いた —



岡山市 矢部 顕

■ 秀家ゆかりの蘇鉄が贈られてきた

関ヶ原の戦いで、西軍の主力として戦い敗れた宇喜多秀家は、徳川によって八丈島へ流刑となった。八丈島で、秀家が手ずから植えたとされる蘇鉄の株分けされたものが、秀家顕彰会「八丈島久福会」から岡山市に贈られてきた。秀家没から三六〇余年の時空を超えて生誕地である亀山城に移植された。

*

我が家の裏の小山に亀山城があった。山陽道を見下ろす交通の要所。戦国武将・宇喜多直家の居城で、備前を支配したのち岡山城に移った。息子の秀家はここ亀山城で生まれたとされる。小山の裾に我が家はあるが、まわりは沼で天然の堀の役目をした。小山は沼に浮かぶ亀の形。(我が家の今の住所は、岡山市東区沼)

豊臣秀吉の備中高松城の水攻めときは、ここで黒田官兵衛らと作戦を練ったとも言われる。水

攻めのさなか、本能寺の変が起こり、秀吉は二万の大軍を引き連れて京に引き返す。世に言う「中国大返し」である。

秀家は秀吉に可愛がられて、若くして五大老のひとりまでに登りつめた。秀吉の養女として育てられた豪姫を娶(よめと)るようになる。直家の跡を継いで、岡山の町の基礎をつくった。

豊臣政権の貴公子と呼ばれた秀家は、秀吉の朝鮮出兵では大将をつとめたりして、最後が関ヶ原の戦いである。潜伏、亡命、流罪と、関ヶ原後も生き抜いた執念の男で、八丈島での生活は五〇年にもおよぶ。戦国武将で八三歳まで長生きした例は他にない。

■ 蘇鉄に花が咲いた

この秀家ゆかりの蘇鉄に花が咲き、実をつけた。一〇月十四日に植樹式をして亀山城跡に移植して一か月、十一月のこと。(写真は2019年11月23日に撮影したもの)

蘇鉄の花が咲いて思い起こすのは赦免花伝説である。

八丈島は一六〇六年の宇喜多秀家遠島以来二六〇年間、流人の島の時代が続いた。その間、一八九八人が流罪でこの島に送られた。初期は、主に政治犯、国事犯などの人が多く、教養ある博識な人が多かったため島民はこの流人たちを歓迎したと言われる。

■ 赦免花伝説

罪が許されると赦免状が届き、その罪人は本土に帰ることが出来る。当時は、秀家の菩提寺である宗福寺の蘇鉄の花が咲くと赦免状が届く前触れと言われた。花が咲くことは流人にとっては狂おしいほどに期待をもったことであろう。

赦免は、たとえば文政年間には六九人、天保年間には四一人、弘化年間には六四人、嘉永年間には三四人など計一〇回におよんだとか。あわせて七四一人に赦免状が届いた。

しかし、宇喜多秀家とその末裔にたいしては何の沙汰も無かった。長い流罪の生活に終わりをつげたのは、徳川の江戸時代が終わった、明治元年の恩赦によってであった。

■ 食料を送り続けた前田家

秀家の妻・豪姫は島への同行は許されず、実家の加賀前田家にもどった。宇喜多家の家老・明石掃部全登は黒田官兵衛の影響からかキリシタンで、城下の民二〇〇〇人(二〇人でなく、二〇〇人でなく)に洗礼を受けさせたという。我が家のそばを流れる砂川の川底からはマリア像の破片などが出土する。家老・明石掃部全登からすすめられたかかどうか知らぬが、豪姫はキリシタンだった。

豪姫は、八丈島の秀家らに食料を送りたいと徳川に願ったが許されず、自らの信仰を捨て、すなわちキリスト教を棄教することを条件に許された。

加賀の前田家は、秀家ならびに子孫一族のために食料と医薬品を、明治の恩赦があるまで八丈島へ送り続けた。徳川の怨みもここまでやるのかと思うが、一度決めたら二六〇年貫き通す前田家の代々の姿勢にも驚く。これらのことは日本の歴史上たぐい稀なできごとではないだろうか。

移植されたばかりの蘇鉄に花が咲いたということは、令和元年の恩赦があるということなのか。それとも、八丈島で生涯を終えた秀家の御霊が、自らの生誕地に蘇鉄とともに帰って来たと言っているからであろうか。(亀山城跡保存会事務局長)



免疫力のある暮らし方

神奈川県横浜市 野本三吉

2016年6月に、沖縄から田谷^{たや}というぼくの住み慣れた村に妻・晴美と戻ってきて4年目。

ここは旧鎌倉郡で、鎌倉時代には多くの僧や武士、ヒソリと暮らしたい隠れ人などが住んでいたと言われる村。従って山の奥には小さな庵^{いりや}がいくつも残っていた。その一つに「龍陰庵」と呼ばれるものもあった。

ぼくの通っていた分教場は、現在は昔の名前をつけて「千秀小学校」となっているが、地名ではなく「千秀」と付けた地元の人いろいろの思いがあったのだと感じる。小さな庵から寺になり、そこで寺子屋が開かれ小学校になったもの。

沖縄から戻ってすぐ田谷という地域の老人クラブに晴美と一緒に参加し、会報を毎月発行する役になってその翌年、会長になり、月に2回シニアクラブのサロンをやったり、シニア大学という名の相互学習、自分史を語る会などをやっている。

ぼくらの子ども達もそれぞれ世帯を持ち、長男の俊輔は北鎌倉の駅の近くに「篆刻」という篆刻店と古物商をやっている。妻のケレンは、小学校の国際交流の講師。

次男の祐輔・美智子夫妻は東京の「旗の台」駅近くでラーメン店「ぶらいとん」をやっている。長女の道子と小泉洋一は二人して鍼灸師として治療をやっている。

孫は高校3年から小学1年まで5人。

そんな感じで暮らしてきたが、昨年、次男夫婦から相談があり、一緒にぼくら夫婦と4人で2月末から久しぶりに大倭紫陽花邑を訪ねることにな

った。

次男の妻、美智子は幼い頃から目に見えない世界との交流があり、自分なりに対応してきたのだがだんだんと激しくなり、最近是不安になり、ぼくに相談があり、ぼくの中では大倭へ連れて行きたいという思いが強く、この間何回か会って話し合い、一緒に行くことになった。

岸田哲さんとも相談し、杉本順一さんと会うことができ、かなり長い時間ジツクリと話すことができた。こうした流れや現実とは特別なことでなく、この世ともう一つの世界との交流や調和させて生きていくことの自然さを感じてとても落ち着くことができた。

存在していることを知ってほしいという思いを受けとめ、対応していく方法も示唆をいただき、とてもよかった。

ぼくも同じようにもう一つの世界とつながっている現実と、どうつき合っていくのかも理解できた気がする。

翌日は岸田さんに奈良公園、若草山、植村牧場などを案内してもらい、奈良の清く深い自然の中を歩くこともできた。

戻って来ると翌日から新型コロナウイルスの感染が一気に拡大し、小中高校の二斉休校が始まり、各種の行事も中止となり、公的機関の会場使用もできなくなり、不安な空気が地球上に吹きあれることになった。

ぼくの中では、近代社会において人間が次々と展開してきた科学技術や暮らし方の結果が、目の前でくり上げられているように感じられてならな

かった。

人間がつくりあげてきた文化、暮らし方の歪みをもう一度、生きものとしての素朴な原点に戻さねばならないと感じる。

インドの最南端、ケプラに伝わってきたアーユルヴェーダは、生体の三つのエネルギーのバランスを調和させることを説いている。

◎風のエネルギー（体内の運動と循環）

◎火のエネルギー（食べもの）

◎水のエネルギー（骨や筋肉の結合）

それは、宇宙では調和であり、人間のからだでは免疫力のある生き方だという気がする。

免疫の研究者、安保徹さんは「早寝早起き」「体を温める」「適度の運動」「日光浴」が免疫力をつけることになると言っている。

ぼくは大倭から戻って、「いのち」の自然のリズムに従って生きる他ないなアと感じ始めている。若い日に沖縄へ行き感じとった感覚が、暮らしという日常の中に戻ってくるような気がする。

免疫力は、からだだけでなく暮らしのあらゆる面で買かれているものだという気もしている。ぼくの中から家も、地域も、自然の場、宇宙の交流の場として解放できそうな思いが、今、ごく自然にできてきている。

大倭の世界が、全ての場で芽生える時がきていると感じてならない。

「田谷長生学生会報」令和2年2月号より

【新年会の一言（今年もよろしく）】

加藤彰彦さん（本名、野本三吉はペンネーム）… 会報「笑顔・楽しく」を発行しています。これからも協力をお願いします。

加藤晴美さん… 昨年転んで骨折しました。コルセットで頑張っています。

表紙絵について

絵画を後世に残そう

F I W C 関西委員会 柳川 義雄

F I W C (フレンズ国際労働キャンプ) 関西委員会は大倭紫陽花邑に交流の家を建設の後、一九六九年(昭和四十四年)夏に、愛生園で「交流祭」を園内の快復者の有志たちからなる実行委員と協力して実施しました。差別や偏見のために故郷に帰れない在園者のために少しでも故郷の気分を味わってもらおうという趣旨でした。

当時、学生運動の盛んな時代で、呼びかけたところ私たちの知らない学生たちもたくさん外から参加して大賑わいの祭りでした。今だと衛生問題で到底できませんが、バナナのたたき売り、冷やし飴、わらび餅等、普通の祭りの露店にあるものをたいていやりました。在園者たちは今と違い五十歳も若く元気で、島のあちこちをよく歩いていたものです。

療養所の職員たちにはおおむね不評で、「私たちが帰った後に布団に蚤が湧いた」とか「茂みの中にアベックがいて目のやり場に困った」などの苦情が出ました。閉ざされていた療養所の秩序をかなり乱した様です。

この祭りを契機にして、F I W C 関西委員会のメンバー(以後キャンパー)たちと療養所の在園者たちのお付き合いが本格的に始まりました。この絵の作者の宮本真二さんも若く、キャンパーたちから「みやもっちゃん」と呼ばれ親しまれていました。祭りの後、秋には愛生園に泊りがけでタコ釣りに行きました。小さな焼玉エンジンの船何艘もで(船を持っている在園者が多かった)沖

に出てイカ針に白い重しを付けて垂らし、タコが抱きついた時に力を緩めずに引き上げると面白い様に釣れてバケツに何杯も獲り、夜はタコの天ぷらで宴会、交流の家へのお土産もタコでした。

逆に在園者たちが関西に遊びに来ることも増えました。一九七〇年にはちょうど大阪万博が開催され、愛生園だけでなく日本各地の療養所から交流の家に宿泊する人が増えました。

〈結婚式の招待〉

しかし、何と言っても特筆すべきは、若きキャンパーたちの結婚式に療養所から参列することが始まったことです。皮切りになったのは青谷善雄・由美夫妻の伏見の御香の宮での結婚式でした。外出すらあまり無かった人たちが、晴れがましい結婚式に参加しても良いのかとためらいながら、十名近い人たちが参列しました。その後、多くのキャンパーたちが自分たちの結婚式に療養所から招待することが習慣のようになっていきました。

亡くなられた方もいますが、以来五十年の長きにわたり私たちの交流は続いています。

〈愛生園で絵を描く人々〉

愛生園で絵を描き続けた人もかなり減りました。宮本さんも、今は亡き奥さんの看病や体調不良で絵筆を置いてしまっています。何とかまた描くきっかけになればと、若いF I W C 東海委員会の女性メンバーを連れて行ってスケッチを描いてもらったりしたけど体調には勝てないようです。そんなわけで表紙の絵は貴重な一枚です。

故人となった三重県出身の加川さんの絵は今、里帰りして津市の小学校に常設されています。現在、愛生園の中で絵を描き続けている人はた

った二人。私はその人たちの絵を何らかの形で残したいと思い、最近絵の写真とスケッチブック一枚一枚の写真を撮って整理する作業を始めます。

〈蔵座さんの活動〉

実はこの活動は九州の熊本から伝わってきました。蔵座江美さんという人が、熊本市現代美術館に学芸員として勤務している時に、熊本の療養所・菊池恵楓園の「金曜会」という絵画サークルのたった一人の生存者を知ります。そして、その金曜会の人たちが描いた絵を保存、記録、展示する活動を始めました。時々F I W C 九州委員会の人たちも協力しています。絵は九百枚近くに及び、患者自治会の協力もあって一枚一枚保存する場所を確保し写真に撮り全国のあちこちで展示会を開いています。故人が残した豚の散歩の絵は、ある人の目に留まりたくさんの他の絵を引き連れて、京都のしんらん交流館で展示されました。

彼女はこの仕事をきちんとやるには勤めていてはだめだと、美術館を退職してしまうくらいエネルギーが豊富な人です。その彼女に愛生園の絵はどうなっているのと問われ、私たちは愛生園の画家を探すことから始めました。とても彼女のようにはいきませんが少しずつでもと思う中で、撮った写真の内一枚が今回の表紙の絵です。

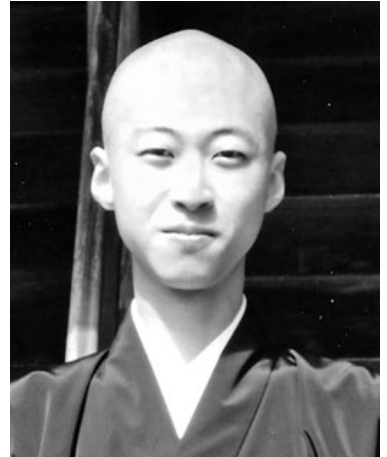
「絵は口ほどにものを言う」。言葉に残された書き物は愛生園にはたくさんありますが、絵は直接私たちの目に訴えてきます。六十年間離れて帰れない故郷の絵を想像して絵を残した人もいます。そういった病気の歴史から離れて描かれた素晴らしい絵もたくさんあります。

皆さんも、これらの絵に触れる機会があればぜひ観に行ってください。(三重県四日市市在住)

寸 莎

第141回

米澤 有宏さん
よねざわ ありひろ



世界は万華鏡のように

小学生の頃から大倭の祭典に参加していた米澤有宏さん(24歳)は、突然僧侶の姿で帰ってきた。どのような心の遍歴があったのだろうか。

現在は浄土宗の寺院では誰も入りがらないという、京都御所に隣接した清浄華院で2年間の修行中である。5時に起床、12時半に寝るまで休む間もなく掃除、法要、講義が続き、クタクタになり、最初の頃は一日中意識が朦朧としていたそうだ。

修行が始まって3日目、有宏さんは全体の教育を担うようになった。夜9時半から一日の反省があり、同期の11人一人一人と話合ったが、厳しさ故に6名が下山していった。

有宏さんは1996年2月、法主様が帰幽されて7日後、大阪府守口市に誕生。既に両親はお腹にいる赤ちゃんの名をいくつか用意し、法

主様に選択して頂いていた。

有宏さんの身内にはお琴、書を究めた人達やお寺関係者、地域では守口のヤンキーだが人懐っこくて温かい人達。色んな世界が周りにあった。

しかし、中学受験で進学校に入ってから、人間関係は単一化した。中学生活も終りかけた頃、ある男子生徒からの悪口と周囲からのどろどろとした空感の中、次第に病んでしまった。初めて壁にぶつかった。

学校へ行けなくなり、担任の「一度休んではどうか」の一言に「パチンとスイッチが切れ、腐った生活」が始まった。しかし彼女ができてくれた事で視点が逆転する。「相手ではなく自分が成長せなあかんのや。今日から気付いた事をノートに書く。一切何者にも学ばず自分で考え続ける」と誓った。浪人時代まで続き最終的にノート5千枚になった。「絶対正しいと言える出発点は何

か」思いつめる程に分かるものが何一つ無く、次第に一切の事にわけが分からなくなり、「暴れ叫びもした」。

高校3年の冬、授業中薫をも絶える思いで坐禅をしていると、パタッと思考が止み、「在る」と直感する。

「世界そのものが絶対的に正しい真理として在る」。そう気付くと学校に行けるようになった。だが、なぜか悩みが止まない。「まだ何かがある」

浪人生活に入り、塾講師のバイトをし、そこで出会った同い年の女性と4年間の付き合いが始まった。熱が4度もある中、旅行に出かけた。

しんどくて寒過ぎて、翌朝空を見上げた時、「今までは物事を自分の側から考えてきたが、そうではなく生の世界の方が先に在る」と気付いた。

生の世界そのものを土台として、生々しく生きている自分が存在する事を了解した。一連の視座が生れた。

「人生とは生々しく生れて死ぬまでの動作で、芸事と同じように究める必要がある。悪口を言っている人も傷ついている自分も単純に生きるのが下手くそなだけで、上手くなれば下手な過去は気にしなくていい。

究める事は無駄を削ぎ落としていくもので積み重ねる事ではない。それは無常の対象にはならないので崩れる事も無い。私は人生を究めるため、ただこの今を調べて生きる、そ

の集中の中に充実がある。

それに、これが私だと思考している私も私ではない。しかしその時々の時を生々しく生きている存在としての私はいらぬ。世界は万華鏡のように織り成して出来ている(縁起)。

これは仏教なのではないか。将来自分は、それまで胡散臭いと感じていた僧侶になると感じた。今まで書き溜めた5千枚のノートを捨てた。

気付いた時は既に受験前の11月になっていたが、大阪市立大学商学部に入學。3回生になり出家した。

留學先から帰国した彼女には、「男の人じゃなくお坊さんになってしまった」と別れを告げられた。悲しく涙は出たが病む事はなかった。「何一つ思い通りにできることなどない、ああ織り成し織り成し。学校もバイトもいつも通りの生活をした。私もまだまだだと思いつながら」

大学4回生になり、ひきこもりや鬱の人を支援するNPO法人を立ち上げ、困窮生活者の相談に尽力した。

「私は大倭の事はよく分かっているんですけど、今日の法主さんの話も(3月月初)本当に手を合わせたくなるようなお話でした。常に何かを問う時に、法主様ならどうお答えになるだろうかと思定しています」。3月31日から2年目の修行が再開された。(聞き手 李章根)

あじさい日誌

3月15日 大倭神宮月次祭。

3月21日 新型コロナウイルスの影響で自粛ムードが気にかか

る時期でしたが、大倭会館であ

じさいの箱懇親会開催。参加者

15名。会計報告や近況報告、背

中に文字を書いてあてるゲーム

や石川君子さんによる真向法体

操等で元気を出しました。

3月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は昭和40年3月23日の法

話をお聞きました。平成31年

3月号『おおやまと』に「極楽

世界を生きる——心こそ自分」として掲載分。

また米澤有宏さんは祭典に参

加された後、「寸紗」の取材を

受けられました(本号7頁)。

3月27日 NPO法人むすびの家の湯浅進理理事長によると、故

鈴木重雄さんに関心を持つとい

う女性が静岡から来訪した由。

3月31日 午前中、藤本宏秋さん(京都府宮津市)が長男・翔

大君の高校進学のお挨拶に来い

午後、長年、大倭病院院長を

務めた松本元嗣さんが法主様の

奥津城に退任のご挨拶に来られ

ました。

第346回大倭会文化行事

布留の神奈備 石上神宮へ ～天理参考館見学～

日にち

令和2年6月21日(日) 雨天決行

集合

※5月17日の予定を延期、乞事前のご確認を

天理総合駅改札口(JR・近鉄共通)に午前10時

交通

①近鉄学園前9時発奈良行(快速急行)⇒9時3分大和西大寺着、9時4分発天理行(橿原線急行)に乗り換え⇒9時22分天理駅

②近鉄奈良駅西北出口から奈良交通バス3番乗り場、9時18分82系統天理駅行乗車⇒9時50分天理駅(540円)

行程

天理駅～(徒歩30分、タクシー利用検討)～

石上神宮参拝散策～(徒歩10分)～

参考館(入場料400円)にて貴重な世界の人類民族考古学資料を見学 ※昼食はお店で

連絡

李章根 携帯 090-9041-8634

大倭会文化講演会のお知らせ

「検討中」でしたが、次のように決まりました。

日時: 令和2年11月8日(日)

講師: 馬場康彦氏

宮城県気仙沼市唐桑町にある社会福祉法人「洗心会」の理事長(初代理事長はハンセン病回復者で交流の家建設に参加した故鈴木重雄氏)。東北大震災では FIWC の活動を支援してくれた。

共催: FIWC 関西委員会・NPO 法人むすびの家

4月1日 大倭滝の峰荘(奈良市千代ヶ丘)の皆さんが邑に来てお花見をされました。

奈良市の小林ゆみさんを杉本

順一さんが応接しました。

4月4日 西斎庭で大倭印刷俵の皆さんが恒例のお花見バーベキュー。一方、大倭殖産俵は今年

は中止とのこと。社員数、密集度の差か?

4月6日 大倭神宮月次祭。午後6時半から大倭会館広間で

4月8日 午前11時から拝殿で須佐緒祭が行われました。お参

りの方はいつもと同じぐらい。

窓を開け、座布団・椅子は間隔を広く取って並べました。

祭典後、新型コロナウイルスのため恒例の園遊会は中止。昭和42年4月8日の法話をお聞き

しました(本紙未掲載)。好天で桜もまだきれい。手作りおは

ぎのお下がりで、庇でお茶を頂く人達もいました。

また交流の家の布団の断捨離中。この日、軽く扱いやすい布

4月12日 禊会。拝殿は須佐緒祭に準じた態勢で用意。雨の中、

参加者も少なく聖歌とご挨拶だけで終わることにしました。

大倭安宿苑では

4月1日 新型肺炎感染予防対策をした上で、辞令交付式。新

卒者3名を含め10名の職員のみが出席しました。

編集後記

▼前月号で昭和39年4月8日の須佐緒祭における法話を、「須

佐緒祭とは、結び・縁ということ」のタイトルで掲載したところ、その法話は以前にも掲載さ

れてますねというご指摘を頂きました。「えーっ?!」。確かに平

成25年4月号に「靈魂」として別元的な「一つの世界」として別

バージョンがありました。同じような内容ですが、今回の方が

やや詳しい。また読み比べて頂けば理解が深まるのかも。(春)

(菅原園)

3月26日 外出ができないう時期、玄関前の満開の桜でお花見をしました。

(須加宮寮)

3月12日 作業納会。作業参加者の1年間の労をねぎらい意見を聞きました。

(長呂根寮)

3月19日(特養) 誕生日の昼食とショートケーキで6名の方のお祝いをしました。

3月25日(デイサービス) 裏の桜の木が満開なので、外に出てお花見をしました。

(茂毛路園)

4月1日 創立12周年記念日で豪華な昼食でした。

(八重垣園)

4月に入って2回ほど散歩に出かけ、今年も花見ができた大変喜んでおられました。

あんない

*月次祭(大倭神宮)

5月6日(振替休日) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第616回禊会5月10日(日) 新型コロナウイルスのため中止とします。

*月次祭(大倭神宮)5月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大本宮)5月23日(土) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。